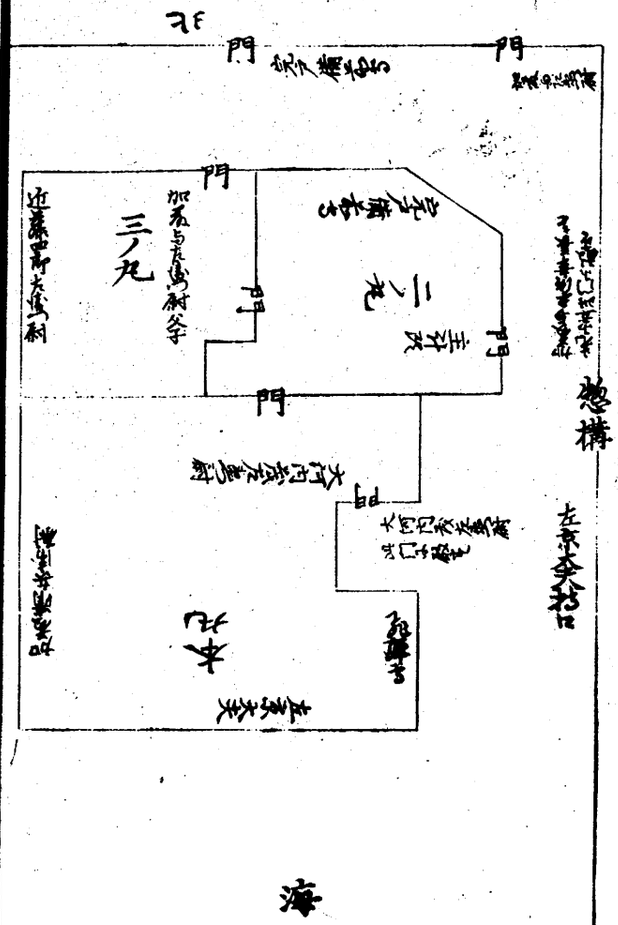
是殘らずあぐるて數日の苦勞をとゞめ休めらるゝ

蔚山城之圖



惣構

廿日出羽の守殿

帝都ハ統屋ゝる大明國の帝王チンセンハて日本勢を討ぬきゝ給ふ是を安念
ハ恩ひ殊ハ朝鮮の大王と初として大明の加勢ハ何の爲ハ事をとゝと上下
の恐ハ言のぶるハ不乃の誹を恥明の帝王八十万騎を引卒し蔚山表ハ出
張せり十二月中旬の頃大きゝる板を削て今月廿二日必ひ其表ハ出張し
一戦ハ乃べし各隨分城の用ゝ有べきゝ手付種元ゞ先ゝの安國寺の法
のあ事ハゝ立てりる士卒々實て讀得ざれバ安國寺ハ見ゝる所ハ
安國寺其責と知ゝ南及ゝ立てりしれを忠隠組中の士ハ知せ
己ハ痛る事有とて軍兵をバ完ゝ付ゝ沙し置ハ徒歩者ハて石

速密に抜出釜山浦へ退けるを依て彼人一人も無りけり

十二月廿二日寅の刻彼の軍勢ども諸人一炊の夢未覚ざるに大明の大軍不意に出く左京大夫幸長麾元ゞ先手の大将完戸伝右衛門陣へ押入散々切まくる寝首を取て陣屋を焼ぬ山合へ引取る然る所に小常の地敵と云傳て一騎も残さず討取と云ども飛騨守秦大夫完戸伝右衛門加藤与次兵衛尉同与平治近藤四郎左衛門尉人数を催し其勢二万三千除人敵の跡を追て十六七町乗出し旌旗を備へ金鼓を打鳴し足軽合の合戦を敵の足軽大将黒色黄色の折掛をはしり廻して幸長完戸と取合せ打合ふ味方の足軽追のぞ敵の足軽一引ひいて踏止め頻に打立味方引ば敵付出く打出

招く打立て下知完く足軽共少しも驚く気色もなく鷹の指麾を待ごとく如し軽き働成ば先陣を清水川の岸に軍を立其を見て先人見事なる働なる軍兵の中立人数の指引地敵に邪び敵の足軽の拍大軍と見て取詰る此山に上り何方を見ると下知せ〳〵合軍監の使未上らざる内に八十万騎の軍勢ゆふこの嶺より垂下し〳〵る馬ほたり黒雲のごとく雲珠巻立く日本の愛宕山程なる大山と此方へどうと打越り飛騨守幸長見て去ば出て大敵の野合の合戦叶ぬと幸長を具足し堺を堅固に持へしとおろる川を乗渡り乗馬を具足し下おろす川瀬を渡越けり明人足と見て大将既に退たりと見るより早く八十万騎我劣〳〵と走出し鬨の聲

諸共に味方の備を七縱八横に駈乱せば大軍の時の奉鬨しく鐘
鼓の響に耳もたぶるを大地もゆらぎ動き味方一戦にも及ばざるに
ほこりに沈まるを四方八面に彷徨に破軍し君臣互に生死の仍場を
知らず窪に谷深く峯高く嵯巖石の切れ重なる只一面に弘まる大軍
に報所なしと八今を思ひ知るべし左京大夫が軍勢八川の曲の深
淵に馬人共に追ひ込まれ半八溺れ死にけり完戸備前守八手の者数
人討れ白鳥の馬弦敵方に奪はれ三村紀伊守等二三人を引具し
退く一吉八大河内長左衛尉只一騎幸長八小田荷小三郎只一騎石
具し馬駿持一人道具持一人馬乗二人に付て引乗しが除り に味方討
死に大河内長を見て大将に請て申しけるを覧に味方多く討れ

に馬乗を立て長を弱と申せば大将馬を返し馬弦を立直し長
を引て味方少し落延れば大将も又引退き小敵後に充満
て出来多く討て大河内大将に見てる下を立捨て大水のぬく
躍に乗る大敵大将と見て乗あひて指引にせ射るといへども
主従僅に四騎を乗り付討きとせば只人の働に成べき
大将の馬駿を乗へ小馬に敵まとる兵共も必死と免をけり亦
蔚山城をき所に堀口一間余りの井溝あり一吉幸長又溝を渡に
出て乗乗る八馬下を見て幸長の軍兵に神弓兵衛管太郎
助兵衛門権兵衛尉抔十騎計一吉の軍兵に八近藤長兵衛尉岩間
所兵衛尉長田五兵衛尉山崎長兵衛尉福地加右衛尉等討洩

きて馳寄ふ近藤弦馳の上をあれば三尺五寸の筒と持て近付
敵を打こゝる早大数八ヒて大將の左右より取切んとて大河内一
吉ふ向て逆る紀州ふ四馬と立きたれ覽ひ敵後と立切ひ早く城
内へ引入て塀裏のほ下知ひ爲ひ一爰ふて敵五騎十騎討其何れの
事ふ爲き又今朝淺壁殿完戸ヶ小屋数ヶ焼きたれ陣来ひ敵五騎
きたれ不完為ひ一くれみーの間ふりとも小屋をもちて自焼仕るべ
と云れば一去殿と脱て高殿ふ已何の切有て長ーやらある河ふ
きたる味方ふ非や已早く退き妻河ふるべーと急る大河内重て曰
剛ふも宜然ふそあるべけき眼ふ遮る程のことふ切不切を入るあるべ
の黄薙黒薙ハ何の味方ふてのそや逆ふく已命を路中ふ捨ふ

爲きとり早くにる成ふきて籠城續難きふ弱て城中ふ火と
あけ切腹ふそ大將の中ふ意るべれと云ふ中けきハ一吉理ふ
伏てちぶ其旨を京ふ吏ふ云ーと云り大河内京地ふ乗向て敵ふ
ふ寄ると云れば妻長完ふて直ふ城内ふ乗入ぬ一吉も一向
余りの井溝を乗せ乗入り大河内もたれ退ふ一吉の士岩間
太郎兵衛尉長田五郎兵衛尉ら乗る溝を飛ばれば大河内乗向て敵を
打乗返ー蹴掛て乗せよ小ふ乗せと云ふ力を添きとる岩
て進ぜ馬より下ると云ふ平敵乗来て岩間ヶ甲を落くぐ
鞍の前輪ふ引付刀の柄を打ちと以て忍首を打抜ふ其馬より
下立んとする所ふ運の極めの悪ーさハ波生滑りる真中ふ下りけ

るを敵はじと駈寄て落しも付び討ぬ其内に大河内は五ヶ所に
四ヶ所矢を射立る九ヶ所の矢を清て引退んとしるを進
元の軍士倭国の住人三村紀伊守只一騎乗こそ居て者物ふの
こひいるものゝ者ども当るを幸くれと云大河内者て類多くも殘り給ふ
急き引そ入ぬと詞をはげ只二人殿して退るに大河内は先
を蘆毛の馬に乗さる大将と覚しく敵横切て通る大河内乗ける
切拂ふ敵其太刀を避るとてひぎをとけるを深け田水の上るれば三
村が前に乗傾るの歩はるを扇風を倒きめくふ横横ふ
伏しに成三村則飛下り太刀を理て敵の上に乗るを内
を出て其の太刀馬まで人とも書び駆おそふ非をそ者を急ぎ

首とを絵と云三村綴をはぎ上て首早く搦落し馬に打乗る
人恙なく殿して駆引はるを角て城に乗入大河内福地加藤蔵尉に
向て一騎に歩ぬと思へば福地しんと答る大河内已に早く乗入て主の
行情を知るやと云ふ幸長の先を渡を佐倉に車ゞ大河内に向て
一騎に八人今あの日本町の焼跡に出て敵に討とさせるとそ云る大
河内聞も敢ず歩に左衛佐已に三国一の腰抜も兎弾に奉仕に八
非をも山をの討死もと見捨て命助りけるにや兎弾に討死
定て八大夫殿一族に首を刎と急りる処に田中小左衛尉其
外二人乗り田中聞て大河内に又左衛佐と悪口さしば飛騨守の
骨を拾と四騎深と共に乗出ぬ兎弾に乗る馬を切て歩

立つゝて矢三本射そゝれ塀と柵との間ゆ以籠りを居めり小池
新八郎清水弥一郎多田孫左衛門中村勘四郎最後を固て守護に向
ふ敵六七騎乗回く指詰引詰散々に射る清水素肌ぬて宵しゝ
主君の矢面ゆ立塞て胸板を裏ゝ計二ケ和とうけりを田中大河
内ゆ是を見て敵を討んと馳ゝりれば皆ゝ取ぬ相一吉ゆ近
付て出討死と承りしゆ角貝ゆ及ぶ事のゝきゝ早ゝ云へきを
各云ゝく悦ゝる脇より清水田中大河内ゆ向て莞ゆと笑て胸乃矢
疵を教て是を見給へ南原のわれと行ゝく能ゝ合ゝるゆ非やいゝゆ
各昔日源平の戦ゆ奥州の次信ゆ能ゝ合ゝるゆ細矢一筋胸ゆうけ息
のゆに出ゆ苦ゝしと云へゝしゆ偽り成ゝ某ゆ大河の精兵ゆ留

竹程の長矢東ゆ大根を切て云ゝ出と射切背骨を割二矢ゝ云
ども少ゝも苦ゝしゝと常の体ゆ語り給ふ大河内田中大ゆ誉て
主君を先ゆ立清水を有ゆめけ城内ゆ入ゝり諸人是を見て天晴
大剛の兵哉南原ゆ於ゆ先乗ゝ今又主の身ゆ代り打死ゝ志のゆど
漢朝の紀信日本の忠信と云ゝ是ゝ也ゝ過ゝ難ゝ敵ゝ聖朝を
死ゝり救人殿の袖を清ゝり賜ゝ中に堀ゝて蔚山の塵と化ゝ共
名ゝ雲の上ゆ聳て末代の国ゝと驚ゝ類ゝ無ゝき勇士ゝり然ゆ一
吉ゆ三ケ所の矢ゝ抜ゝ流ゝ血ゝ揉ゝて塀裏の後ゆ倒ゝ
西ゆ太田兎彦ゝ北ゆ藤与右衛門父子完戸備前ゝ東ゆ浅野右京
大夫南ゆ海ゝれば堅ゝ守ゝ及ゝ敵ゝ攻ゝ寄ゝ角ゝ大河内

義太郎門尉只一騎小屋場を見て乗出でを見て田中小右衛門尉
川村十郎林角右衛門尉是八河内義兵陣屋を敵
焼さんれば自焼せんと主君小申る河あり主命小ゆくれぞ傍
輩に云ぶぞる事小非ず我一人ゆて奉陣下陣焼拂べき為あり
と云けるバ田中を初て各尤とて我劣らじと乗出し己の刻の終
より女陣小云ふ程り夜中亥の刻小ゆまで籌を焚小屋場を固小
拵居ゆり然小加藤主計頭清正ハ蔚山より二百五十條町を隔て西生
海小在城せしゆ左京大夫完戸ゆ兵過半討死し飛騨守を初て諸
将の如小大明人数八十萬騎を以て蔚山を五重ゆ囲ゆ事国小
清正黒糸威の鎧を著小し内冑の緒を偏て小性十五人使番の

士五人持筒二十挺步行者三十人召連七反の小船小乗てゆ夫ん馬
乗舟の表小押立操小様で押寄ゆ清正大音を揚て今此時小
至て水夫少しも怠慢小切沈むべし若し刻遅くして
敵小彩を五切て城中ハ乗事十ぶるに於ハ船中の水夫ハ悉
悉く切捨腹十文字小掻切て城中上下の員を覚し海中小飛入
て則龍神と顕て空を飛行し鉄丸石を降して大敵を靡べし
と令り進んで長刀を杖小突て步の板を踏鳴し艦舳を翔て
立ル小多門矢のぬくるり大軍の籌丸小て波上を照し沖ハ白晝
の如くなるバ舟ハ片し矢を射小似り既小戌の刻計に蔚山に乗入い
まぶ鬨打ぬめる時節小ゆのまく城中小入ル清正一吉

小對面し斜ならんに成で言ふる八此城ハて貴老一所ハ貴と並ぶ
後日某ガ屋の有相ならば別ハ能ざるハ角冥利ハ叶いものぞと勇
みなる元来此城ハ主計殿ガ居城とるもくきとの事なれ除而
の人見て止ぬ程ハ有あ〳〵林共大敵の攻を受く今明日ハ滅亡
べき蔚山へ真垂ハ乗入なる志し天晴大剛の猛將ぞと感じる角
て三大將塀裏を巡り諸方の守口を下知し敵陣を巡見しなるば
清正使者の箕部金吾夫ハ向て施彈夜の陣ハ篝火の有ば数入
ひなるとと問箕部畏くあれハ我躰相ハ内兵ハ屋を持堅め居
らまいや中清正飛州ハ向て如何ぞ計や敵推寄て討れん
かハ城内ハの外の騒りなるべし詮ふき事を申計まいとあり

一吉答て日本國中の神罰を誓て某ガ計ふるハ此ぞ己ガ
存ぜ知る支ハ五度も三度も某ガ下知を破て曽て聞ぬもの
三人も五人も定く其奴ガ仕業成べしと有けるば清正まと打
拍貴老ハ相の人と三人五人持給へるや清浦山安人ハ名ハ
の大名ハて少生まれ某ガ家ハ予ガ中條背く程の者ハ人を
持ぬ貴道愛彼ハて諸人ハもぬけ給ふ事實ハ理るとと
感じ尚ハ重ハ夫汝ハ向て早く引べき由申渡し同道まべ
しと申り箕部畏て足軽三百人連来て柄の新を感じ清正
の口上細くと言渡て田中九津見大河内林川村等者て三大將の
口上を計ハ答ハ箕部ハ程の敗軍に硯も筆も有ば為ぬ

其上此時ハ折紙雪の如ハ有ると云しらバ各咲くいらに其沙汰
遠ハ流石の人なるら法を矣給へるや仮初の舟橋の押への番島や
堤の石垣の番遠見筭の番ホウ所ホウ品々ホウ大将の墨付
見ぎしてハ引入ざる武士の法ホウたまして今已の刻より今ホ至
て僅の少勢一生の樂も変ると大敵の中に方死の矛と成て陣屋
ホウる詮もなく大将の判形も見ぎして引取屋ホウ覚悟ホ及ぬ
事ありと敵ぐ云ちしぬ其部ホ飛るして急ぎ乗込り其旗
を三将ホ言上ス則其沙汰ホ永ホて今日の手柄比類なきと又言
を及ぶて三大将連署の状其部又持参ス軍士ホ戦見て去バ
ホ小屋を自焼して引入屋しホ足軽を引纏ひ其沙汰先拵

城へ入ると云ふバ其部各ホ同道中ホと清正ホ対ホ浮を一同云
入屋しホ又此小屋ホ火を掛ハホ勢を見切て敵推寄ハ難儀なるへ各
の口ホハ其ホ在給へと各ホ各国て愚ホホ何ハ今ホて是ホ苦労
しハホ小屋自焼せん為ホ也しホ今此時の敵ハ足軽業ホ成ホ
早く戻ホ給へしホ若ホ路中ホ踏止て加勢ホ立ホとしホバ其ホ
引返しホ敵陣ホ入ホ討死ホて其ホ分ホ無ホ合戦ホ成ると云る其沙汰
て各の口ホ上ホと中雑しホと云ホとも大事の戦ホ入ホ時刻移て先屋
ホ成ホ有ハ其ホ取入ホとて足軽を引ホとひ引ホ成ホ拵各ホ屋
ホ自焼しホけるバ白昼ホ異ホ成ホ故ホを見て石火矢大筒を打
ホ大ホを射ホ成ホハ雨ホ如しホ去ホとも軍士ホ驚ホを鑓の法首を

揺りて足を乱はしぶ〻ふ敵五六十間ゟ五六町付ふ〻真ふ
見ゆる味方急き取入を見て同じく墓来りけゝ後を先を敵ふ向て
二十間計ゟ後ゟ追ふ雑ゟく城へ入ゟ斯りける所ふ三村紀伊ゟ大河内ゟ
仮ふ来て今朝相討の首三方ゟ披露ゟ〻と云大河内参て其を今と云
披露ゟ〻ゟ聊ふ相討ふハ仮早く持参ゟ〻と云ゟ〻ハ三村蒐角
ふ供申〻と云相討ゟゟ非ゟふ〻ゟ〻ゟ大河内ゟ出けふふ
三村首を持出て三大将の前ふ伺ふ〻毛利中納言ゟ家臣三村
紀伊ゟと申ふふ今朝大敗軍の刻大河内義ゟ来つ尉と某と只二
人殿仕り則ち高名ゟ大河内と相討ふゟと申三将驚て扨今朝の仕
合ふ殿の上の高名と云事比類ふきゟ柄共言語ふハ述ゟ〻ふ

死せ仕て死人ゟ者共をとさえ今日の上ふゟ無比き眼きてと思ひ
〻ふ如此の大勇ゟ人の言ゟ高名勝ゟ云ん〻ゟ思ゟゟと以の外ふ驚ゟて
大河内申ゟふハ某切掛ふ太刀馬ふゟ人ふゟ掛りふハゟハ聊ふ相討ふ
ゟ紀伊ゟ後ゟ一人の高名ふと申三村重て宗義大河内ゟ太刀馬ふ
掛りふ依て某ゟ和ふて倒ゟゟと相討と言葉ゟとはゟひふゟハゟとひ
人ゟふ太刀掛ふ共大河内ゟ太刀風を強ふゟて某ゟ和ふて落ゟゟ
ゟハ某申ゟ討取ふんや義角相討ふ仰付〻ゟふ浮と云大河内強て
ふ討ふ死と云切清ふゟと関ゟ抑ゟ聞ゟ及ゟふ争ふ或ハ奪首ゟふん
掛又ふ討ふゟ無猶を相討ふ仕ゟゟ世の中ふ三村ゟふ討と云ゟゟ
大河内合戦ふ〻ふ古今ふ稀ふ感ゟゟふ堪ゟゟ主計ゟ者共来